

# Gift of Life

## Vol.2

兵庫腎疾患対策協会会報

発行：兵庫腎疾患対策協会  
住所：〒659 芦屋市船戸町4-1  
ラポルテ4F(安井眼科内)  
TEL：0797-31-8288  
FAX：0797-22-6144

### 会長挨拶



会長 石神 襄次

昨年発刊された会誌「Gift of Life」も遅れ馳せながら Vol.2 をお届けできますことを嬉しく存じます。昨年、本会としては、腎移植に不可欠なコーディネーターの研修に菊池耕三君を米国に派遣し、国内各地で多大の反響をよんでおり、又、加賀乙彦氏の講演会を開催して聴衆の方々に深い感銘を与える事ができました。本会設立後の3年半の間に医療の世界ではいろいろな面で目覚ましい進歩がみられ、各種の難病の治療に貢献しています。ただ、遺憾ながら腎疾患についてはまだ画期的な進歩は見られておらず、若年者の発病頻度が減少しているものの、なお数多くの人々が人工透析にたよって不自由な生活を余儀なくされており、腎移植の件数も横ばいの状態を続けている状態です。しかし懸案の臓器移植法案も漸く国会で審議が始められようとしており、本年こそ我々が初心に帰って本来の目的を推進すべき年と考えております。皆様方の絶えざる暖かいご支援をお願いしてご挨拶とします。

### 活動報告

1993年度

- 4月 会報「Gift of Life」Vol.1 発行
- 6月10日～7月21日 菊池耕三氏をコーディネーター研修に米国に派遣
- 9月4日 兵庫腎疾患対策協会第3回総会 於：ポートピアホテル 講演会開催 『先端医療と人間』加賀乙彦氏
- 10月3日 第13回腎バンク登録者拡大街頭キャンペーン協力
- 10月31日 神戸新聞にて腎移植推進啓蒙広告掲載(兵庫県内53万部)

正会員	331名
賛助会員(個人)	4,048名(2045名)
賛助会員(団体)	633名(94団体)

1994年度(予定)

- 5月 会報「Gift of Life」Vol.2 発行 研修会開催
- ヨーロッパ臓器提供病院教育プログラム(EDHEP) 「悲嘆にくれる親族に対する対応と臓器提供の依頼」 於：ポートピアホテル
- 7月9日 「Gift of Life」パッチ作成
- 7月9日 第4回総会開催 於：ポートピアホテル 講演会「日本人は死ななくなった」 講師 安井博和氏(兵庫県理事)
- 8月初旬 芦屋サマーカーニバルチャリティーパーザーに参加 その他
- 10月 神戸新聞に腎移植推進広告掲載

### 1994～1995年度 兵庫腎疾患対策協会 幹事

会長	石 神 襄 次	金 津 和 郎	田 口 隆 子	福 西 孝 信	森 村 美 佐 子
	荒 川 創 一	守 殿 貞 夫	長 久 護 三	藤 岡 長 宏	安 井 多 津 子
	生 駒 文 彦	後 藤 武 男	西 里 一 司	藤 田 嘉 一	芳 野 芳 一
	井 上 聖 士	高 光 義 博	八 馬 富 久 子	松 本 修	吉 永 和 正
	井 原 英 有				

(50音順)

会計監査 黒 丸 正四郎 西 村 多枝子

### 石神会長叙勲

平成6年4月29日春の叙勲で石神襄次会長が勲三等旭日中綬章を受章されました。

### 總會のお知らせ

日時 1994年7月9日(土)  
場所 ポートピアホテル  
講演 「日本人は死ななくなった」  
講師 安井博和氏(兵庫県理事)

## INFORMATION

Gift of Life

パッチができました



お申し込み先

兵庫腎疾患対策協会事務局  
〒659 芦屋市船戸町4-1  
ラポルテ4F(安井眼科内)  
TEL: 0797-31-8288  
FAX: 0797-22-6144

### お 願 い

協会の活動のため、ひきつぎ暖いご支援をお願いいたします。

ご寄付・会費 振込口座

- ・ さくら銀行 芦屋駅前支店  
普 3511181  
兵庫腎疾患対策協会
- ・ 郵便局 神戸01110-1-9421  
兵庫腎疾患対策協会

## 臓器移植コーディネーター米国研修報告

兵庫県腎臓バンク腎臓移植推進員  
菊池 耕三



平成5年6月7日から8月14日までの約2ヶ月の間、兵庫腎臓病対策協会の助成を受けて、アメリカへ移植コーディネーター留学をしました。留学の目的は、移植先進国であるアメリカの完成された移植システムと、OPO (Organ Procurement Organization : 臓器調達機関) に所属する移植コーディネーターの役割を実体験を通じて学ぶことでした。

まず、UNOS (United Network for Organ Sharing : 全米臓器分配ネットワーク) の理事長である Gene A. Pirce 氏を訪ね、UNOSの臓器センターで研修を受けることになりました。以下にUNOSの目的、臓器センターの業務、そしてOPO、Life Link of Florida, University of Florida で研修しました移植コーディネーターの役割を報告いたします。

UNOSの大きな目的は、移植医療が公平、公正に行われることを保証する全米臓器移植法を実行することにあります。主な任務は、

1. ドナー (臓器提供者) を増加させること
  2. 提供された臓器が無駄にならないよう公平かつ公正な臓器分配を行うこと
  3. 科学的な移植データの分析、等
- です。それらの任務を遂行するためにUNOSには、コンピューターサービス、広報、教育、財政、地域統括、政策開発、研究分析、臓器センター、臓器抽出と搬送プランナーサービス等、多岐にわたるパートメントがあります。そしてその中心は、全米移植ネットワークの中核である臓器センターです。臓器センターは年中無休でドナーとレシピエントの間の調整や連

絡のために、臓器の分配や輸送について適切なアドバイスをしています。臓器センターで働いていると、とにかくドナー情報の多さに驚きます。1992年度、全米のドナー数は4521件でした。1993年度は前年度より200件あまり増加したと聞いています。それでも移植希望者の増加数は追いつかず、まだまだ臓器が不足しているのが現状です。UNOSでは、さらにドナーを増加させるべく、ナショナルキャンペーンのプロジェクトを組織する等、より一層普及啓発活動を強化していく方針です。

移植コーディネーターの実地研修は、NATCO (北米移植コーディネーター協会) が主催する1週間の教育講習会をArizona州Phoenixで受講した後、FloridaにあるOPOで行い、脳死下での臓器抽出に15例経験することができました。

アメリカでは、ある病院でドナー候補者が出ると、OPOに連絡されます。OPOはUNOSの臓器センターに連絡し、臓器センターはレシピエントを選びOPOに知らせます。OPOの移植コーディネーターは、直ちにドナーの病院に向き脳死の確認を行うと共に、本当にドナーに成り得るか否かドナーの医学的な評価を行います。問題がなければ直ちに臓器提供を依頼し、同意が得られたらドナーの管理と平行して、HLA検査の手配、臓器抽出チームと移植病院の選定、レシピエントの選択、手術室と麻酔医の手配等を行い、移植に至るまでの一切を指揮します。その仕事の手際よさ、システムの完成度は見事としか言いあらわし方がないほど素晴らしいものでした。その他、OPOでは一般市民、医療従事者への啓発活動、臓器提供病院の開発等を学ぶことができました。この経験が今後のコーディネーター活動に役立てて行く所存です。

最後になりましたが、留学の機会を与えて下さった兵庫腎臓病対策協会をはじめ、国際ソブチミスト神戸東の皆様、そして、この多忙な折り、心良く送り出して下さった周りのスタッフの方々に、紙面をおかりしまして厚く御礼申し上げますと共に、アメリカ留学の報告とさせていただきます。



## 講演会報告

# 「先端医療と人間」

●日時 1993年9月4日(土)  
PM5:00 ~ PM6:00  
●場所 神戸ポートピアホテル  
大輪田の間



講師  
加賀 乙彦

東大医学部卒、精神科医・作家  
著書「宣告」  
「生きていく心臓」他、

医者でありながら小説を書いた者の心得として、医学の問題は書かないと決めていた。しかし、数年前から医師としての目が文学者の目と重なって役に立つならば、利用した方が良いのではないかと思うようになった。そのきっかけは、10数年前の、父の心筋梗塞、母の脳出血による死に始まる。両親とも救急処置として、集中治療室に入れられたが、その時、短期間の医療の進歩に驚くとともに、施設の潤いがないことに考えさせられた。先端医療とは人間のためにやるのではあるが、その心とか患者の立場を考える治療が行われているのだろうか、脳死状態にある者に人工呼吸器をつけることの意味に悩み、これは医療ではなく一種のセレモニーではないかと言ひ疑問である。人工呼吸器がわが国で普及されたのは1960年以降であるが、実際にこれによって治療した自分自身の体験からも、脳全体が壊されて蘇生の望めない場合、それを強行することはむしろ残酷ではないか、医療の現場で起こっている事を小説家で、かつ医者の目で調べたいと思うようになった。1980年代になってから、世界中で脳死者からの心臓移植が行われているのに、日本では1965年の和田移植以後1例も行われていない。1979年に法律ができて、死者からの腎移植が公認になり、腎透析者は10万人をこえ、しかもその3分の2が移植を希望しているのに実際に行われている数は極めて少なく、莫大な経費を払って臓器移植を求めて外国に行く人が増

えている。日本は技術面で世界の水準にあるが、人間の心、患者のケアに関しては非常に遅れている。別問題ではあるが、死刑は現在大部分の国で廃止されているのに、わが国ではそれに批准せず外国から抗議的となっている。和田移植以後わが国で移植が殆ど行われない原因として、それが密室的なかで決定され、施行されたことがあげられる。外国では和田移植の前年施行したバーナード氏にしても、最近ヒビからの移植で有名になったスタッフ教授でも、度々告発をうけながらも失敗例も含めてその経過をどんな人にも公開している。脳死、尊厳死については現在日本ではなお反対する人が多いが、脳死者が提供の意思を表示している場合、その臓器を摘出しなさいことは、その権利を奪うだけでなく、生きて残っている人の権利も奪うことになる。日本で臓器移植の普及されない原因の一つとして、情報の公開を否定する態度があり、脳死に関する各種委員会の場合でも結論はだされても、その内容は秘密にされ、公表されていない。民主主義とは、人間は全て平等であり、同じように意見を言う権利を持つことである。インフォームド・コンセントとは、医師は患者に解るように説明し、患者は納得するまで質問する事によって、同意が成立する事である。臓器移植にさいし、一番大事なことは、人の心であり、その心が本当の民主主義の意識に目覚めた医療体制を確立させることが望まれる。(文責石神)

